

# 景観保全に及ぼす大衆性の破壊的影響に関する実証的研究

オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆(2) \*

An empirical study on destructive effects of vulgarity upon preservation of landscape

Implication of Ortega's "The Revolt of Masses" for Problem of Landscape (2) \*

小松佳弘\*\*・羽鳥剛史\*\*\*・藤井聡\*\*\*\*

By Yoshihiro KOMATSU\*\*・Tsuyoshi HATORI\*\*\*・Satoshi FUJII\*\*\*\*

## 1. はじめに

近年、我が国において良質な景観の形成に向けた取り組みが盛んに進められており、景観法の施行や地方自治体における景観条例の策定などの法制度の整備を含め、様々な方策が検討されている<sup>1), 2)</sup>。しかし、その一方で、依然として、ゴミ投棄や路上駐車など、景観への配慮を欠いた行為が後を絶たないことがしばしば指摘されている<sup>3)</sup>。さらに、よりよい景観や風景を創出することを意図してデザインされた建築物や土木構造物が、地域との適切な調和を欠いた景観や風景を創出してしまふ危険性も懸念されているところである<sup>4), 5)</sup>。

このように、良質な景観の保全・育成の為の様々な取り組みがなされているにもかかわらず、「良質な景観の破壊」に至るといふ事態が生じている背景に、人々の景観に対する意識や態度そのものが必ずしも社会的に望ましいものではないという可能性が考えられるところである。特に、良質な風景なるものが、時代と地域を越えた普遍的・絶対的な価値と深い繋がりがあるであろうこと<sup>4)</sup>を踏まえれば、上述のような良質な風景の破壊の進行は、人々の普遍的・絶対的な価値への志向性が低下していることの一つの徴候である可能性が浮かび上がることとなる。

こうした人々における絶対的価値への志向性の喪失については、古くから哲学的論考の中心課題であり続けてきたが、その中でもオルテガは、その著書「大衆の反逆」(1930)<sup>6)</sup>において、近代大衆社会にみられる価値喪失の中に、人間的生の否定や非道徳が胚胎していることを指摘している。オルテガの大衆論の特徴は、大衆を政治的・社会的階級として捉えるのではなく、万人に共通する「心理的事実」として捉えようとしたところにある。オルテガによれば、大衆とは「凡庸であることを自認しつつ、何ら努力もせずに責任も負わずに自らの権利を主

\*キーワード：景観

\*\*学生員、東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻

\*\*\*正員、工博、東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻

\*\*\*\*正員、工博、東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻（東京都目黒区大岡山2-12-1、

TEL03-5734-2590、FAX03-5734-2590）

張するような人々」であり、このような大衆が社会の中心に座ることによって様々な社会の問題が生じている20世紀初頭の欧州での状況が、オルテガによって痛烈に描写されている。

オルテガの「大衆の反逆」は、1920年代のヨーロッパを対象としたものであり、また、とりたてて景観論を展開したものではない。しかし、今日の景観破壊の淵源に、人々の心的傾向が存在するならば、そうした帰結を導く心的傾向は大衆人に顕著に見られる特徴であることはまさにオルテガが暗示するところのものである。それ故、オルテガの大衆論が景観問題について示唆するところは少なくないものと予期されるところである。

筆者らはこうした認識の下、オルテガの大衆論を踏まえて、個人の大衆性が風景・景観保全に及ぼす否定的影響について以下の仮説を既往研究にて措定した。

仮説

大衆性の高い個人は、良質な風景を軽視し、破壊する

そして、大学生200名を対象としたアンケート調査を実施し、本仮説について実証的に検証したところ、それを支持する結果を得ている。

ただし、先行研究は、単一の大学の学生を対象にしたものであり、仮説の真偽をより厳密に検証する上では、より広範なサンプルを用いた仮説検証が必要である。そこで、本研究では、上記の仮説がより一般的に確からしいか否かについて確かめるために、全国の一般成人を対象にしたアンケート調査を実施し、本研究の仮説を改めて検証することとした。

## 2. 調査の概要

### (1) 調査概要

本研究では、以上の仮説を検証するために、2007年4月13日～17日の期間に、インターネットを利用したWebアンケート調査を実施した。アンケート回答者は、インターネット調査会社のモニターから抽出した全国の成人男女1000名である。回答者の属性を表-1に示す。回答者の選定の際、回答者の年齢分布が概ね実際の日本国民の年齢分布に従い、さらに各年代毎に男女が半数ずつ

表-1 回答者の属性

サンプル数：1000名
性別：男性500名 女性500名
年齢：平均44.4歳 (SD 13.3歳, 最高69歳, 最低20歳)
居住地：
大都市：500名 (東京23区 200名, 大阪市 200名, 名古屋市 100名)
中都市：300名 (福岡市 100名, 札幌市 100名, さいたま市100名)
地方：200名 (九州6県(福岡を除く) 100名, 四国4県 100名)

つとなるようにサンプリングした。さらに、また、全国から均一にサンプルを確保するために、表-1 に示すように、全国を大都市、中都市、地方の3つに区分し、各都市の居住者からサンプリングした。

## (2) 調査項目

### a) 大衆性

大衆性指標を測るための質問項目として、筆者らの先行研究<sup>8)</sup>で提案された大衆性尺度を用いる。傲慢性と自己閉塞性の2尺度19項目の質問(表-2)を設定し、各項目について「とてもそう思う」から「まったく思わない」の7件法で回答を要請した。ここで、傲慢性とは、「ものの道理や背後関係はさておき、とにかく自分自身には様々な能力が携わっており、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向」を表しており、自分自身や社会等の種々の対象に対する自らの制御能力に関する過大な評価に関わる質問項目から構成される。一方、自己閉塞性とは、「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表しており、外部世界に対する関心および外部世界との紐帯やその中での責務に関わる質問項目から構成される。なお、測定した19項目に対して因子分析を行ったところ、これらの尺度に対応する2因子が抽出されることが改めて確認された。ただし、表-1の項目より「自分のことを、自分以外のものに委ねることは一切許されないことだと思う」「自分を拘束するのは自分だけだと思う」「人は人、自分は自分、だと思う」「日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う」「もしも奉仕すべき対象がなくなれば、生きている意味がなくなるのではないかと思う」の5項目を削除することにより、尺度の信頼性係数が向上したため、本研究ではそれら5項目を除く2尺度14項目を大衆性尺度として分析に用いることとした。項目除外後の信頼性係数は、傲慢性について0.76、自己閉塞性について0.70であった。

### b) 景観に対する態度・意識

先行研究<sup>7)</sup>で用いた以下の5項目に対して7件法で回答を要請した。なお、これらの質問項目は、国土交通省が平成15年に発表した「美しい国づくり政策大綱」<sup>9)</sup>に基づいて作成したものである。

・「ゴミのポイ捨てをすることがありますか」(「ゴ

ミのポイ捨て」)

・「生活の利便性のためには景観を犠牲にしても、仕方がないと思いますか」(「生活の利便性」。なおこれは逆転項目であるため、分析では数値を逆転した)

・「古い美しい町並みを維持していくことはとても大切なことだと思いますか」(「古い美しい町並みの維持」)

・「あなたが、「古い美しい街並み」に住んでいる場合を想像してください。その時、あなたは、その街並みを維持するため、どれくらいのコスト(時間とお金)を負担すると思いますか」(「街並み維持のコスト負担」)

・「それぞれの地域の風土を大切にしていかなければならないと思いますか」(「地域の風土」)

## 3. 結果と考察

### (1) 大衆性と景観への態度・意識との相関

大衆性を構成する2尺度と、景観への態度・意識に関わる質問項目間の相関分析を行った結果を表-3に示す。表-3より、すべての項目について、傲慢性と自己閉塞性ともに、景観に対する肯定的態度・意識については負の相関が、否定的態度・意識に対しては正の相関が示された。これらの相関係数は必ずしも高い水準ではなかったものの、すべての相関において0.1%水準で統計的に有意であった。なお、先行研究の結果<sup>7)</sup>と比較すると、「ゴミのポイ捨て」と自己閉塞性との相関、ならびに、「古い町並みの維持」と傲慢性との相関について、

表-2 大衆性尺度の質問項目

#### 「傲慢性」尺度

- 1) 自分の意見が誤っている事などない、と思う
- 2) 私は、どんな時でも勝ち続けるのではないが、と何となく思う
- 3) 自分個人の「好み」が社会に反映されるべきだと思う
- 4) どんなきも自分を信じて、他人の言葉などに耳を貸すべきではない、と思う
- 5) 「ものの道理」には、あまり興味がない
- 6) 物事の背景にあることには、あまり興味がない
- 7) 世の中の問題は、技術ですべて解決できると思う
- 8) 自分のことを、自分以外のものに委ねることは一切許されないことだと思う
- 9) 自分を拘束するのは自分だけだと思う
- 10) 道徳や倫理などというものから自由に生きていたいと思う
- 11) 人は人、自分は自分、だと思う
- 12) 日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う+

#### 「自己閉塞性」尺度

- 13) 伝統的な事柄に対して敬意・配慮をもっている+
- 14) 日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている+
- 15) 世の中は驚きに満ちていると感じる+
- 16) 我々には、伝統を受け継ぎ、改良を加え、伝承していく義務があると思う+
- 17) 自分自身への要求が多いほうだ+
- 18) 自分は進んで義務や困難を負う方だ+
- 19) もしも奉仕すべき対象がなくなれば、生きている意味がなくなるのではないかと思う+

+逆転項目

先行研究では有意な結果が見られなかったが、本研究においては、いずれも有意な相関が示されている。

(2) 景観への態度・意識に影響を及ぼす主要要因

景観への態度・意識に関わる5項目を従属変数に、大衆性2尺度、性別、年齢、地域を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果を表-4に示す。

表-4よりわかる第一の傾向は、すべての従属変数に対して、傲慢性と自己閉塞性が景観に対する肯定的な意識・態度に対して負の影響を、否定的な意識・態度に対しては正の影響を有意に及ぼしているという結果が見られた、という点である。

一方、個人属性に着目すると、上記の傲慢性と自己閉塞性の様に全てに対して有意な係数を持つ変数は見られなかったが、いくつかの係数が有意なものとなった。すなわち、女性ダミーについては「ゴミのポイ捨て」「古い美しい町並みの維持」に有意な影響が、年齢については「生活の利便性」「街並み維持のコスト負担」「地域の風土」に有意な影響が見られた。この結果は女性が男性に比べて、ゴミのポイ捨てをせず、古い美しい町並みを維持していくことは大切であると思う傾向があることを意味しており、景観に肯定的な意識・態度を持つ可能性が示唆している。さらに、年齢が高いほど、生活の利便性のために景観を犠牲にすることに否定的で、

街並み維持のためのコスト負担意志が強く、地域の風土を大切にしていかなければならないと思う傾向が高くなることを示している。一方で、人々の居住地域が上記の意識・態度に及ぼす影響は見られなかった。

繰り返しとなるが、性別・年齢も景観に対する意識・態度に影響を及ぼすことが示されたものの、すべての項目に対して有意な影響を示しているのは傲慢性と自己閉塞性の2項目のみであることを鑑みれば、個人の景観に対する意識・態度に大衆性が強く影響を及ぼしている可能性が示唆されることである。

また、個々の偏回帰係数に着目すると、「生活の利便性」について傲慢性が、「古い美しい町並みの維持」「街並み維持のコスト負担」「地域の風土」について自己閉塞性が標準化偏回帰係数の絶対値が他の変数に比べて最も大きい水準となっていることが分かる。この結果からも性別や年齢といった個人属性に比して、大衆性が景観に対する態度・意識に及ぼす影響が総じて大きい可能性が示唆される。なお、「ゴミのポイ捨て」については女性ダミーの偏回帰係数が最も大きかったものの、傲慢性の偏回帰係数はそれに次ぐ水準であることが分かる。

以上の結果から地域、年代、性別によらず個人の個人属性が大衆性が景観に否定的な影響を強く及ぼしている可能性が示唆された。

表-3 景観に対する態度・意識の記述統計と、大衆性と景観に対する態度・意識間の相関分析結果

	平均	標準偏差	傲慢性		自己閉塞性	
			r	p	r	p
ゴミのポイ捨て	2.075	1.417	.224	<.001	.114	<.001
生活の利便性	2.772	1.404	.247	<.001	.180	<.001
古い美しい町並みの維持	5.367	1.566	-.172	<.001	-.229	<.001
街並み維持のコスト負担	4.456	1.178	-.149	<.001	-.275	<.001
地域の風土	5.444	1.196	-.266	<.001	-.351	<.001

r:相関係数, p:有意確率(両側)

5. まとめ

(1) 仮説の検定結果

本研究では、現代社会において、良質な景観が破壊されている、という問題意識のもと、オルテガの「大衆の反逆」<sup>6)</sup>での論考に基づいた、「大衆性の高い個人は、良質な風景を破壊、軽視する」という仮説を指定し、一般成人を対象としたアンケート調査から仮説検定を行った。その結果、相関分析、ならびに、回帰分析の双方に

表-4 景観に対する態度・意識を目的変数とした重回帰分析の結果

	ゴミのポイ捨て		生活の利便性		古い美しい町並みの維持		街並み維持のコスト負担		地域の風土	
	β	t	β	t	β	t	β	t	β	t
(定数)		4.173		5.196		22.792		22.412		31.644
傲慢性	.214	7.189 ***	.234	7.705 ***	-.139	-4.492 ***	-.111	-3.670 ***	-.221	-7.591 ***
自己閉塞性	.063	2.123 *	.129	4.266 ***	-.204	-6.594 ***	-.246	-8.119 ***	-.306	-10.508 ***
年齢	-.049	-1.655	-.179	-5.969 ***	-.015	-0.477	.166	5.561 ***	.121	4.209 ***
大都市ダミー	.019	0.478	.058	1.472	-.006	-0.160	.073	1.839	-.003	-0.068
中都市ダミー	-.029	-0.739	.042	1.068	.001	0.025	.044	1.111	-.006	-0.151
女性ダミー	-.294	-10.034 ***	-.019	-0.647	.079	2.586 **	-.018	-0.606	.030	1.037
決定係数	.147		.116		.078		.118		.185	

sample size = 1000, \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

注) 大都市(東京, 大阪, 名古屋在住)500sample:中都市(札幌, 福岡, さいたま在住)300sample:地方(九州(福岡を除く), 四国在住):200sample

において、大学生を対象とした先行研究<sup>7)</sup>と同様に、仮説を支持する結果が得られた。

## (2) 傲慢性と自己閉塞性の相違

本研究より、傲慢性・自己閉塞性ともに景観に対する意識・態度に否定的な影響を及ぼしている可能性が確認されたが、その中でも、傲慢性はとりわけ「ゴミのポイ捨て」と「生活の利便性」に影響を及ぼしていることが示され、自己閉塞性はとりわけ「古い美しい町並みの維持」、「街並み維持のコスト負担」と「地域の風土」に影響を及ぼしていることが示された。このように、傲慢性と自己閉塞性の効果に相違が見られた理由には多様なものが考えられるが、例えば以下に述べるような可能性が考えられる。

まず、傲慢性の高い個人は、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向が強い個人であるが、その性質故に、「ゴミのポイ捨て」と「生活の利便性」といった自己の行動に直接関わるために自己利益を直接損ねる危険のある行為に対しては過剰な拒否反応を示す一方で、「町並の保持」や「風土の保全」等の自己利益の阻害感を直接的に喚起しないような事柄に対しては、それほど大きな拒否反応を示さなかったのではないかと考えられる。一方、自己閉塞性の高い個人は、外部に対する自発的な働きかけを忌避するため、「町並の保持」や「風土の保全」等の、景観維持の責務を要請する行為からは逃れようとする傾向が強かったのではないかと考えられる。

このように、大衆性の一つの側面である傲慢性は、特にゴミのポイ捨てに象徴される直接的な景観破壊行動に主要な影響を及ぼしているという様子が、ならびに、大衆性のもう一つの側面である自己閉塞性は、とりわけ景観の保全行動のような社会的な責務を忌避する態度を醸成し、その結果、間接的に景観を破壊する帰結をもたらす可能性がそれぞれ示唆された。

また、先行研究<sup>7)</sup>では、景観に対する態度・意識と自己閉塞性は「ゴミのポイ捨て」を除いて 0.3~0.5 程度の高い相関を示し、相関がいずれも 0.3 以下であった傲慢性とに比して、より高い水準で相関していることが確認されたことから、傲慢性よりもむしろ、自己閉塞性の方が景観破壊を促進する行動と強く関連している可能性が考えられた。しかし、本研究の結果からは「ゴミのポイ捨て」に加え、「生活の利便性」においても傲慢性の方が強い影響を及ぼしている傾向が示された。このような差異が見られた原因として、様々な可能性が考えられるが、その一つとして先行研究が学生を対象にしたものであるのに対し、本研究では一般人を対象にしたことに起因している可能性が考えられる。この点については、学生を対象とした再追試の可能性も含めて、今後検討を深

めていく必要がある。

以上の議論を踏まえれば、傲慢性と自己閉塞性共にそれぞれ別の形で景観に否定的な影響を及ぼす可能性が示唆されるところであり、良質な景観を保全・形成するためには大衆性の2要因を共に抑制していくことが肝要であると言える。

## (3) 大衆性の抑制と良質な景観の形成

以上の結果について改めて留意すべき点は、本研究で対象とした「大衆」が特定の人間を対象としたものではなく、普遍的に人間に存在する、つまり万人が多かれ少なかれ持ちうる「心的傾向」である点である。それ故、本研究の仮説が真であるとするなら、景観や風景に関わるすべての人々がその地域における景観や風景を破壊する可能性を有しているという深刻な問題が暗示されているものと考えられる。さらに、先行研究<sup>7)</sup>は大学生を対象としたが、本研究で行った一般成人を対象とした調査の結果から、以上の仮説が一般の人々においても同様に確からしいことが示され、大衆性こそが、景観問題を深刻化させている本質的な原因の一つであるという可能性が改めて確かめられたものと考えられる。

このように個人の「大衆性」が本質的な課題である以上、人々の大衆化を可能な限り抑制するための努力が必要であると考えられる。今後、取り組みに関する実証的、実務的な検討を続けていくことが必要であろう。

## 参考文献

- 1) 青山俊樹：美しい国づくり政策大綱と景観法を受けたさまざまな取り組み，土木学会誌，vol.90，No.2，pp12，2005．
- 2) 加瀬靖子・横内憲久・岡田智秀，景観法に基づく景観計画の策定プロセスに関する研究，景観デザイン研究・講演集，Vol.2，2006．
- 3) 藤井聡（共著）風格ある風景と「行動変容」，In. 土木と景観—風景のためのデザインとマネジメント—，学芸出版，pp. 9-54，2007．
- 4) 藤井聡：風景の近代化とニヒリズム—宗教性なきデザインの破壊的帰結について—，景観・デザイン研究論文集，No. 1，pp. 67-78，2006．
- 5) 桑子敏雄：風景の中の環境哲学，東京大学出版会，2005．
- 6) ホセ・オルテガ・イ・ガセット：大衆の反逆（神吉敬三 訳），ちくま学芸文庫，1995．
- 7) 小松佳弘・羽鳥剛史・藤井聡：伝統的な景観保全に及ぼす大衆性の破壊的影響—オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆—，第 35 回土木計画学研究発表会・講演集，2007．
- 8) 羽鳥剛史，小松佳弘，藤井聡：大衆性尺度の構成についての研究—Ortega“大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析—(投稿中)，心理学研究．
- 9) 国土交通省：美しい国づくり政策大綱，2003．